

十四（まだ見ぬ都市のリリイたちと）

春は牡丹餅。ぼたんもち

夏は夜船。よふね

秋はお萩。あきはぎ

冬は北窓。きたまど

要するに、おほぎを北窓と言うのは季節ごとの呼び名であつて、餅米をつかずに餅を作るため、つきなし——月無し、つまり北の窓と呼んだ、という洒落である。

呼び方の意味を蒼泉みずみに教えてもらい、いっつも忘れちゃうんだ、と言いながら、翼彩つばさは北窓を四分の一ほど口に頬張る。

んくふう——と洩らして、眼をうつとりと閉じる。大納言小豆と黒糖で練った餡の、口の中に拡がるしつかりした甘みや鼻腔に留まる強い香り、きめ細かい舌触り、そして餡の層に包まれた餅米のねっちりひんやりとした食感がたまらない滋養となつて、弱った身体の隅々まで染み渡るよう。

「まだ本調子じゃありませんから、今は半分にしましょうね」

翼彩の側には蒼泉が膝を崩して座っており、飲みますか？　と言いながら玄米茶を差し出す。差し出したかと思うと自分の口許に寄せて、ふうふうと少し冷ましてからまた差し出す。

なんて柔らかい無表情だろう——と翼彩は思った。

結局翼彩は、ヒュージの討伐に成功したため、それまでの失態に関しては、嚴重注意のうえ年明けから向こ

う半年間、般若心経の写経をする——という処分に留まった。元々、破門と切り出した円覚は、それ以上きつい灸を据えるつもりもなかったし、蒼泉の強い懇願もあつたという。

では翼彩は安穩な暮らしをしているかというと、世の中上手く出来ているもので、討伐の日から丸二日間風邪が治らず、休養室で高熱にうなされていたのだ。左手に受けた傷から破傷風菌やヒュージ細胞の侵食も疑われたが、検査の結果、ただひたすらに風邪であるという診断がされた。

今日の夜になつてようやく熱も下がり、休養室から僧房の自室での療養を許された頃には、もう護摩祈願会ごまきがんえは終わつており、蒼泉が氣を利かせて北窓をふたつ確保したから良かったものの、国家鎮護こっかちんごを願うことも、出来立てでほかほかの北窓を元氣いっぱい頬張ることも、まったく叶わなかつた。

オリジナルメニュー考案係の大役も、自動的にお流れとなつた。
これもある意味、罰といえば罰である。

自室に移つて布団から上体を起こし、タオルで身体の汗を拭いてもらい、バジヤマの上にひよこ柄の半纏をかけてもらつて、こうして北窓を食べられるぐらになつたのも、ここ一〜二時間のことである。

十二月三十日は、一年間で討伐したヒュージの冥福を祈るとともに、大日如来の元で真つ当な仏弟子となることを願う鬼獸供養が、先程——午後十時まで行われていた。

部屋の障子の向こうから、入つていい——？ という声が聞こえる。

翼彩が蒼泉に頷く。蒼泉はどうぞ、と声をかけると、障子を二十センチほど開けて、八部衆レギオンのリーダーである与謝野よさのほのほと、サブリーダーの茅野ちのちの調が顔を覗かせる。

「あ、もう起きられるんだね。よかつたよかつた！」

障子に手をかけたまま、ほのほが嬉しそうな笑顔を見せ、くりんとウエーブがかかつたツイントールが躍る。

「みなさんも心配だそうなので、先日の反省会という名目で連れて来たんでございますよ」

♪夜だからなるべくお静かに、とトラベルギターの弦を弱く鳴らすと、障子を全開にしたほのほと調の後ろに、五人ほどの姿が見えた。

「入つてよかとー？」

甘い声を出して、二年の紀甘魅きのあまみが上がり込んでくる。

口紅を差していないので、今は安穩としたオフモードであると思われる。

抱えていた大きめのタツパーを翼彩の掛け布団に置き、蓋を開ける。

そこには白胡麻をたつぶりまぶした北窓が十個ほど詰まっていた。

翼彩が目を丸くして、幸せそうに大きく息を吸いこむ。

「美味しそう！ すごい！ まみまみ！」

元気が出るかと思つて、作つてみたとよーと、スローリーに語りながら得意な笑顔を見せる甘魅。

みずみず、一個食べていいかな——？ と手を延ばそうとするが、蒼泉が心配そうな顔をする。

「じゃあさ、半個だけ。だめ？」

せつかくだから、今みんな食べていから——と言うと、蒼泉は幼児の愛くるしい懇願に負けた母親のような、困惑と諦観を帯びた無表情でこくりと頷き、人数分のお茶の用意を始める。

また一人、翼彩たちの部屋に上がり込んでくる。

「正直言つて、今回の一件では迷惑しているわ」

二年の西園寺香流さいおんじかおるだ。

切れ長の眼で睨みを効かせながら、肩の線を崩さない均整の取れた歩き方で布団の翼彩に歩み寄つて見下ろ

す。

「厨房は破壊するわ、戦鬪の足を引つ張るわ、負傷者まで出すわ——」

「ごめんなさい——と、眼鏡の奥の鋭い視線を見上げて翼彩が言おうとするが、香流は目を輝かせながらその言葉を遮った。

「手段や場所は言語道断。だけど——ヴァジュラの実戦特訓をしていたとは尊敬に値するわ」

えっ？ と目を丸くする翼彩の布団の枕元に膝を下ろし、背後から念を押すように語りかける。

「でもね、抜けがけで強くなるうだなんて、アンフェアだし協調性に欠けるわ。次は一緒に安全な場所で特訓するわよ。いい？ 頑張りましょう」

「いや、こないだのは特訓とかじゃなくて——」

翼彩は説明しようとするが、蒼泉は掛け布団越しに翼彩の膝に手を置いて、説明したんですけど、人の話聞かないんです——と、首を横に振り、小声でささやいた。

「香流か姐さん、相手は病人かつ怪我人でございやすよ、どうにも心配りが足りなくていけやせん」

——と言って片頬を膨らましなが、一年の春道はるみち麻子まこが、おっと——前後間違いましたる節はまっぴらご容赦願います、と右掌を差し出して仁義を切り、失礼しやすと言いながら部屋に入ってくる。

脱色したストレートで右眼だけ覗かせたセミロングヘアと、背中にトライバル模様が入った寝間着代わりのピンクのスウェット上下、翼彩の布団の足許に深くしゃがみこむ姿勢で、どういう環境で生きてきたかが垣間見える。

前髪の隙間から覗かせる右眼で、キッと翼彩を睨みつける麻子。

翼彩の口許が一瞬引きつり、部屋の空気が固まる。

深呼吸したあと、少しハスキーな声で翼彩に語りかける。

「翼彩姐さん、一人で抱え込んで、淋しいじゃあござんせんか。困ってんだつたら、あつしに相談してくれたらいつくらでも——」

証拠隠滅に厨房丸ごと壊しまくってやりやしたのに——と言いながら涙ぐみ、中指の背で瞼を擦る。

ありがとうね、泣かないでと言つて翼彩が手を伸ばそうとすると、麻子から近寄つてきて、次は前もつておつしやつて下せえと、涙目でがっしりと両手を握る。

逆にお前の耳に届かなくてよかつたわ、とほのほは安堵した。

「私も作つてきたツ！ 翼彩の快復を願うツス！」

輝礼隊でヒュージと交戦していた壬生輝凜が甘魅を押しつけて、少し灰色がかつた白いピンポン玉大の塊を翼彩の目の前に差し出す。

これは何でございますか？ と調が尋ねる。

「ちまきツス！ 一昨日の午後からご飯を少しずつこねて作つたツス！」

「それで灰色がかつてんのか！」

僧名が輝礼なのに汚つたねえこの女と言つて、壁に寄りかかつていたほのほが、爆破されたかのように腹を抱えて畳の上で笑い転げる。

調と麻子は街の変質者でも見るかのように、輝凜をただ訝しげに見つめていた。

「プリーヤー！ 食べ物をおもちやにしたらいけないんざぞ」

両手を抜けてオーバーアクションをしながら、本日最後の客である、三年のアリユーニヤ・レスコー・沖が、いつの間にか麻子の後ろに鎮座ましましていた。長身ながらも顔立ちは幼く、幼いながらもアーティストの作つた球体関節人形のように整つた顔立ちで、吊り目で明るい色の虹彩がきらきらと光る。

アリユーニヤさんよ、と麻子が振り向く。

「今日翼彩を捜している時、丁度良の角に枯れ葉が舞つたのざぞ。これは我が八部衆にとつて吉報を報せる——」

呼びかけを無視してアリユーニヤが話を続ける。

沖さーん、と呼び方を変えて麻子が再び呼びかける。

「聞いてんのかコラ、自称良の金神！」

何ぢや自称とは！ 混じりつけなしの神ざぞ！ と言つて、アリユーニヤは三度目にして、漸く麻子の呼びかけに応える。

「何度も言つてやすけど、キャラ——盛りすぎじやござんせんかね。一応尼寺なんで、金神キャラだけでもなんとかできやせんか」

戦いが終わつたら、手前様と一緒にアイドルデビューする約束じゃねえですか。その際に、一人だけキャラが熱盛り過ぎるんでございやすよ——と嘆くと、そこが肝なのざぞ、と、逆に論す口調で言い放つ。

「ところで翼彩よ、もし今度破門されたら、こんな辺鄙な山寺など出て、良の金神の元に仕えるのはどうぢや？」
にこにここと微笑つて翼彩に向かつて手を抜げるアリユーニヤ。

あ——、と翼彩が申し訳なきそうに上目遣いで、アリユーニヤの顔を見て口を開く。

「わたし、いつつもアリユーニヤさんが言ってること、全然わからなくて。どうしたら」

この女、頭おかしいだけだから気にするこたあござんせんよ——と、間髪入れずにアリユーニヤを指差し、口を挟む麻子に、ブロンドの髪を輝かせながら指を差し返す。

「お前は魂の立て替えが必要なようぢやな」

「何だとコラ。だいたい余所様の寺で手前つちの宗教勧誘するたあい度胸だな」

麻子が顔を近づけて食ってかかったところに、蒼泉が喧嘩はやめて下さい、と止めに入る。

「翼彩様の身体に障りそうな口論は困ります」

麻子はすいやせんと翼彩と蒼泉と頭を下げたあと舌打ちをして、手前覚えてろバカこのクソ尼——といった感じのことを無音で口だけ動かして罵倒し続ける。アリユーニヤは勝ち誇ったかのようにいい気味ぢやと大袈裟に肩を揺らして笑う。

お二人は本当は仲良しだから、こういうやり合いが楽しくてしょうがないんでございます——と言って、調はCメジャーのアルペジオを奏でる。

笑いから覚めたほのほが、甘魅つちの持つてきた北窓みんなで食べようよと言うと、皆が一斉にタツパーへ手を伸ばし、満たされたような表情と約一名——満たされたような無表情で頬張る。

しばしの静寂のなか、美味しいね——と言って翼彩が恍惚とする。

蒼泉と目が合うと、蒼泉もはい、と言って無表情で微笑む。

調の言つたとおり、麻子とアリユーニヤは睨み合いながらも、半分食べた北窓を互いの口に差し出して食べる遊びをしている。

「今回ヒュージを倒したのは、翼彩さんの機転の賜物だったわね。ちよっと見なおしたわ」

香流が北窓を頬張りながら話を切り出すと、輝凜はほのほにたずねる。

「結局、ヴァジュラ最強ってことツスカね——？」

「いや、ヴァジュラ振り回してりや勝てるってほど単純じゃないはずさ。今までだって」

これからだって——と歯切れが悪そうに答えるほのほに、北窓を持った翼彩が口を開く。

「わたしは——ヴァジュラはリリイにとつて、命そのものだど学びました。強いけど、はかな儂いんです」

だから、むき出して使うものじゃないなって思いました、と言つて、力なく笑みを浮かべた。

ほのほが感激の表情を見せながら、翼彩の華奢な両二の腕を掴む。

「うわ——随分立派なこと言えるようになったね、ひよこ！」

——と肩を揺らそうとしたところを蒼泉に止められる。

「まだ微熱はあるんです。本当、大事にお願いします」

ごめんごめんと翼彩に謝りつつ手を離し、いやあ、と感慨深そうに腕を組んで語り始めた。

「いや、翼彩っちの成長に感動しちゃつてさ！ ホウ、鉄は熱いうちに打つて言うじゃない？ でもそれだけじゃ駄目なのさ。例えば金太郎飴ってあるじゃん？」

畳の上に深くしやがみ、所謂ヤンキー座りをした麻子が、は？

と思ひ切り感じの悪い反応をするが、ほのほは無視して続ける。

「——金太郎飴はさ、あんまり熱いうちに切ると、金太郎の顔が潰れちゃうだろ？

かと言つて冷めてから切ると、パキンと割れちゃうじゃん？ 何事にも適度なタイミングつていうのがあるのさ。あたしは翼彩っち

がこうやって自分から、次のステップに踏み出すのを待つてたのさ、うん」

そう考えると、なんだか翼彩っちの顔が金太郎飴に見えてきたよと、ほのほは自分の言葉に一人頷く。

「ぼってん、それは今とってつけたような理屈とよー」

「翼彩姐さんを金太郎飴とか、なんか馬鹿にしてんスか？」

次々と後輩から異を唱えられる。

「お前ら、あたしがいいこと言ったのに横槍入れないでよ！ 特に麻子！ 一応あたし、みんなを育てる八部衆^{レギオン}のリーダーだからね？」

「翼彩が成長したのは良の金神のご利益ぞぞ」

「そのの！ お前の横槍が一番混乱するんだよ！」

各自が好き勝手に言いつ散らかすなか、よろしいですか——と、蒼泉が控えめに手を挙げる。

「ん？ どした？ 蒼泉っち」

得意そうにほのほが振り向く。

「関東でいう金太郎飴——いわゆる組み飴は、台に乗せて、刃を鈍くした包丁で叩くように切るんです。それは、基本的には冷めてからと相場が決まっているんです」

無表情だった。

一瞬部屋が静まり返ったあと、あ、そう——そうだったかな、とつぶやきながら、じゃ今のナシで——とほのほが赤面して縮こまる。

♪勉強不足でございますと、弦を爪弾きながら、調が満面の笑みで、後頭部を搔いて黙るほのほをからかう。

「焰蘭パイセン、翼彩ちゃんがいま金太郎飴に見えとつと——？」

甘魅に返す言葉もない。

「調子に乗って、適度なタイミングとかいい加減なこと言うから生き恥をかくんです」

香流が生き恥とまで言ってきた。

「一人でパキーンと割れてろ」

誰さいま言ったの！ とほのほが怒鳴るが、皆数秒前の会話のことも忘れて思い思いに北窓を食べ続けているので、自分もどうでもよくなつて、北窓を食べ続けることにした。

「なんかこの八部衆レギオン、束ねるの大変ツスね——」

今在室中のメンバーで、唯一外部の八部衆である輝凜は、ほのほが率いる八部衆の難しさを間近に感じて、ほのほに心配の声をかける。

「でしょでしょ？ わかる？ とほのほも同意を得ようとする。

「こんな連中ばつかだから、勝手にやらせたらチームプレイになんないんだよ。だからうちの八部衆はガツガツに型にはめた戦い方させてるのさ。乱戦になったら、放つといてもこいつら好き勝手に戦うしね」

「だいたい人のこと言えないけどさ、こいつら尼僧見習いに見えるか？ と八部衆を見回して、口の中で香ばしい白胡麻をぶちぶちと噛み潰す。

——ならさあ、と甘魅が目を輝かせる。

「いっぺん鎌倉府のガーデンの、百合ヶ丘女学院高等学校とかに研修行つてみるとええよ。あの『アールヴハイム』とか、今は『一柳隊』とか、優れたレギオンいっぱいだよ。レアスキル持ちもいっぱいいるとよ。制服も和服もどきじやなくてゴスつぽいとよ。鶴岡八幡宮つるがはちまんぐうもあるとよ。てんこ盛り系ワツフルの元祖の店もあるとよ。オシャレなオーガニック系カフェもいっぱいあるとよ。横浜まで脚を伸ばしたら大人の世界とよ。気分はアダルトリイとよ」

スロートークながらも興奮して熱弁を振るう。

誰が聞いても研修より旅行目的で言っているのは明白だが、よわい 齡十六、七の女子高生と考えれば、本来ごくごく自然なことである。

そうでございやすね——と麻子も頷く。

「鎌倉府でしたらあつしみたいな忘ぼうはち八でも、小洒落たオーブンカフェで、ホイップクリームとベリー系ジャムが乗った、こう、ふわっふわのパンケーキとカプチーノでも戴いてるときに、アイドルのスカウトとかが来るかもしれない」

そういう世迷い言はせめて小洒落た女になつてから言うのござ、とアリュニャが嗤うと、聞こえよがしに舌打ちをしたあと、何だどこの尼——と掴みかかる。

うるさくて迷惑なんですけど、と言つて二人を止める香流。

「觀光や休日を楽しむほど、鎌倉府は呑気なエリアじゃないわ。一流のガーデンが悪戦苦闘してるような激戦区をなめんな、つて感じよ。甘魅の感覚はちよつとアバウトリリイなんじゃないの」

上手いこと言いました——と、香流に同調するように、調はマイナーコードのアルペジオを奏でた。

「確かにその通りですね。昔つから、野暮と化け物は箱根から先、なんて言いやすけど、むしろ関東のほうがヒュージは多く出ておりやすからね。激戦区でござんすよ」

風の噂に聞いた、関東の強豪ガーデンの数々を思い起こす麻子。

「ま、こんな京都の山寺の尼僧リリイが関東に行くときは旅行なんかじゃなくて、供養か遠征か、どっちかさ」最後に生き残つた子は、みんなの分の回まわり頼んだからね——と、ほのほが八部衆一人一人の顔を、優しいまなざしで見つめた。

世界は、もう幾年も前からヒュージの脅威に脅かされている。

こうしている今も、山のあなたの空遠くで、リリイたちが命散り落ちるまで戦っているのだ。

目の前に立ちはだかったヒュージを一体、次の一体、と倒して、やがて地上からヒュージが果つるまで、なるべく生き続けたい。

いつか——いろんなリリイと一緒に戦いたいな、と思いつながら、翼彩は窓の外を見た。蒼泉もその視線を追った。

夜空には、燐光のような雪がちらついていた。

湿雪だから、屋根に積もりもせずに滴り、消えてしまうのだろう。

でも、朝になるまでに滴りは、一滴また一滴と寄り添って、やがて鋭く大きな氷柱になるはずだ。

この空が、寒ければ寒いほど。

(続)

十四(まだ見ぬ都市のリリィたちと)PDF版

発行日 2018年4月18日

著者 DOGMASK
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
